

2024年12月3日

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2023 年度採択案件)

1. 業務の概要	
(1) 案件名	ブータン王国の School Agriculture Program 課題解決強化事業
(2) 実施団体名	学びファシリテーション
(3) 実施期間	2023年12月4日 ~ 2024年12月3日
(4) 実施国	ブータン
(5) 活動地域	ブータン王国・ワンデュ・ポダン県
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>弊団体の代表と他1名はブータンのプロジェクトに3年間関わっていた。プロジェクト内での課題として農産物の販売があった。販売やマーケティングのことを意識した生産をしなければならなかったが、その知識が乏しかった。そのため、コロナ禍で遠隔の指示しかできない時期には、販売・マーケティングの活動が実施できなかった。</p> <p>一方、地域の高校への出入りもあり、そこで School Agriculture Program (以下、SAP) のことを知った。高校では栄養摂取と農業生産技術の教育するために SAP というプログラムを全国的に実施している。生産技術教育はキャリア教育の文脈でもあるが、生産への視点ばかり強い。しかし実際には、農家として家計を立てるためには販売・マーケティングの視点は必須であると考えた。SAP Head の B. B. Rai 氏からは、私たちの SAP への課題意識はその通りだとし、是非農業省セクレタリーに提案して欲しいとのことだった。</p> <p>ブータン国全体からすると、2020年に若者の雇用についてワンチュク王が言及して以来、国の優先事項となっている。また、「ブータン国全国総合開発計画 2030 策定プロジェクト・ファイナルレポート」において、農業振興の3つの柱の一つが「市場志向型農業の振興」になっている。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>対象国の農業教育において、従来の農業生産技術等に加えて、販売・マーケティング手法に関する教育の必要性の理解を促し、全国の高校で実施されている農業教育プログラムに、マーケティング講座が組み込まれたためのアクションプラン策定を支援することを目的とする。</p>

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

1. プログラム開発

日本からオンラインにて、プログラム実施高校の担当教師 (Mr. Norbu) と農業教育プログラム (マーケティング分野) を開発した。

2. プログラムの実施

合計で8コマ+1コマ (現地視察) を使い、マーケティングに関する活動を実施した。対象学生は中学校3年生相当から高校3年生相当。全体構成は2時間を「商品」を知る時間、3時間を「顧客」を知る時間、2時間をプレゼンテーション、1時間を振り返りとした。プレゼンテーションでは実際に顧客となる商店やレストラン経営者を招き、彼らの課題解決を提案した。また、今回の商品として取り上げた鶏卵の農園等を訪れ、学生たちの理解を深めた。

3. 関係機関の訪問とヒアリング

教育省大臣、教育省スクールプログラム局局长、Health and Wellbeing 課課長、県庁教育担当者、実施高校校長の話聞き、実施プログラムのブータン国での整合性および親和性について確認ができた。その他農業関係役人およびビジネスマンとの意見交換も行った。

(2) 実施成果：

1. プログラム開発

現地の担当教師 (Mr. Norbu) とオンラインにおいて問題なくコミュニケーションができ、協働で農業教育プログラム (マーケティング分野) 開発ができた。現地で農業教育に携わる教員の協力のもと、ブータン国の現実に沿ったプログラムができた。

2. プログラムの実施

予算、および団体スタッフの時間制限があり、初めの2コマ+最後の1コマ (計3コマ) はオンラインで活動を実施した。上述の通り担当教師 (Mr. Norbu) のプログラム理解がとてもよく、現地でよいファシリテーターとして演じてくれた。また、顧客へのプレゼンテーションにおいては、学生たちのプレゼンを聞いて、提案商品に興味を示し、商談までにつながった。商品が売れるという実体験を学生たちに示すことができた。

担当教員のみならず、同僚教員および校長からも興味を示してもらい、本プログラムの実施プロセスや体制がブータンで受け入れ可能なものであることが確認できた。

3. 関係機関の訪問とヒアリング

多くの方々の話から SAP の現状の更なる理解を得た。SAP は選択科目であったが、昨今 (1年ほど前) の教育改革によりクラブ活動になった。また、高校卒業後は強制的に Gyarsung Program という自律的、実践的な能力向上プログラムに学生たちは参加しなければならなくなった。そこでは農業に関するプログラムが実施される。

インタビューした教育担当者全般からは、マーケティングに関するプログラムが欠けており、必要であるというコメントをもらった。その中でインプット形学習でなく、主体的な活動での学習である点を評価してもらった。

また、農業やビジネス関係者からは「ポストハーベスト」を扱う機関や考え方があることを教わった。収穫後についての活動であるが、作物の保管、加工、商品パッケージが現状その範疇に属している。そこにはまだ、マーケティングが入っていないことを知った。しかし、市場を見るとブータンブランドを活用した店舗展開をしている会社も出てきており、すでにマーケティングやブランディングの動きが社会にあることを知った。

事業の最後に今回教育省内でサポートしてくれた Health and Wellbeing Division の課長（チーフ）とオンライン会議（11月）を開いた。8月にブータンへ行った時から異動があり、違う課長であった。新しい課長においても SAP へのマーケティングのプログラムの投入にとっても興味を示してくれた。本事業の 2nd フェーズについて有益な議論ができた。

Health and Wellbeing Division の課長の異動により、新課長とのオンライン会議を行った。元教員であり、SAP を担当したことがある人物だった。実施プログラムのことについて説明し、今後のマーケティング分野の取り込みを SAP で行っていくことにとってもポジティブであった。本事業目的のアクションプラン策定まで話を進めることはできなかったが、今後の実施事業概要を提示し説明することはできた。「マーケティング」という概念の理解が協力してくれた教員（Norbu）や新課長には薄い印章を得た。そのため、時間をかけながら「マーケティング」概念を理解してもらうとともに、本事業の取り組みが大切である理解を深めていってもらうことが必要だと感じた。

（3）得られた教訓など：

教育プログラムや関係者との面談が、想定以上に進んだことの大きな要因として、ブータンで関わってくれた方々の献身的な関与がある。プロジェクトがブータン国の現状に即したものであることはもちろんであるが、実施には関わる人たちの自律的な協働が欠かせない。それをなくして、プロジェクトの本質的な成功はないと感じた。

（4）今後の活動・フォローアップの方針：

本プロジェクトで関係した教育関係者はもとより、それ以外にもお会いした方々から本プロジェクトの有用性を示してもらった。今回は一校のみモデル校としてプログラムを実施したが、広域での展開ができるようなプロジェクトを組みたいと考えている。JICA の 2024 年度草の根技術協力事業支援型に応募した。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

ブータンに入国したところから、多くの方が迎えに来てくれた。今回のカウンターパートである教育省職員はもとより、プログラムを実施する高校の教員、そして以前のプロジェクトで関わってくれていた方も空港で迎えてくれた。また、ブータン国での活動中でも、多くの方々（県教育担当、自然科学系大学教員、活動高校でない他高校等）が興味を示してくれた。大学ではプロジェクト内容についてプレゼンをしてくれという要請を受け、事業周知を目的としてプレゼンテーションを行なった。

また、今回受け入れてくれた高校教員はランチを作ってくれたり、温泉に連れていってくれた。そのような経験や共有した時間を「つながり」として認識してくれ、ブータン国での活動がプロジェクト実施以上の人間的なつながりの活動へと発展した。そのつながりが、事業が予定通りいかないときにも「なんとかする」力になったのだと思っている。目的を共有し、人との信頼関係が結ばれた中で、現地での活動がスムーズに進められた。その後の教育省とのオンライン会議においても主体的に参加してくれた。

(2) 活動の写真

写真は別紙をご参照ください。

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

私たちのような実績のない団体に対しても独自の評価によって、チャンスを得たと思っています。また、相手国との事業実施に係る覚書がない中でも、資金的な支援だけでなく、相手国政府とのコミュニケーションにおいても支援をいただけたことは大きな助けとなりました。

団体として初めて国外での活動を実施できたことで、本団体の活動域が広がっていくと思います。そしてブータンの人たちと多くコミュニケーションを持って、次回の事業展開についても議論することができました。このようなネットワークを作ることができたのは、未来への大きな資産になります。

(2) 活動の写真



空港で迎えてくれた教育省の職員
この後も、本事業のプログラムに参加してくれた。



中三から高三の生徒が30名参加。
グループ毎に話し合いから学習してもらった。



街にでて、対象者にヒアリングを行なった。
質問作りも、学生たちが行なった。



School Agriculture Programや農業をするフィールド
トリップも行なった。



プログラム最後は、グループ毎のプレゼンテーションを
行いました。



プログラムを終え、学生と関わってくれた方々で記念写
真。